

日蓮聖人のご生涯（7） 依智から佐渡へ

高森大乘

○日蓮聖人斬罪赦免の理由

文永八年（一二七一）九月一日未明、龍口での斬罪を免れた日蓮聖人は、当初の予定通り、佐渡国守護代本間重連の邸宅のあった相模国依智（現、神奈川県厚木市）へと連行されることとなりました。

斬罪赦免の理由には、北条時宗の妻の懷妊があつたとも言われます。またこの時、大學三郎（比企能本か）という人物の手助けがあつたことを、日蓮聖人は後に述懐しています（『大學三郎殿御書』一六一九頁）。

大學三郎は、日蓮聖人から「坂東第一の御てかき」と絶賛された書家で、同じく書を好んだ安達泰盛と交流があつたと言われます。安達泰盛は、ほかならぬ当時の執権北条時宗の妻の父（舅）で、懷妊した子（のちの北条貞時）の祖父にあたるのです。この関係と、日蓮聖人の大學三郎についての叙述を重ね合わせれば、大學三郎が安達泰盛に働きかけ、日蓮聖人の斬首中止の助命運動を行った可能性は高いと思われます。孫の誕生を間近にして、僧侶の頸を斬るほど不吉なことではないと進言したのでしょう。

ちなみに、日蓮聖人の龍口法難に関わった侍所所司の平頼綱と外様御家人の安達泰盛は、日蓮聖人歿後に対立を深め、弘安八年（一二八五）、平頼綱は霜月騒動で安達泰盛を滅ぼし実権を握り、恐怖政治を始めました。これに危機感を抱いた北条時宗の子の貞時は、永仁元年（一二九三）、平禅門の乱で祖父安達泰盛の敵を討ち、平頼綱らを滅ぼしています。

『立正安国論』での指摘の通り、二度の外寇（蒙古襲来）と、度重なる幕府の内訌によつて、やがて鎌倉幕府は瓦解の道をたどるのです。

○幕府の対蒙古政策と日蓮教団弾圧

鎌倉幕府は、日蓮流罪を言い渡した翌一三日に「軍勢催促御教書（関東御教書）」を発令し、鎮西に所領のある御家人の西下を命じて対蒙古政策を整えてゆきます。同時に、蒙古防衛政策の一環として、国内における悪党鎮圧が実行に移されるのですが、これが鎌倉の日蓮教団にも大打撃を与えることとなりました。

文永八年（一二七一）九月の弾圧は日蓮聖人の門弟の間にも広がり、何よりも九月一二日以降、転向者が続出し、「千が九百九十九人は堕ちて候」（『新尼御前御返事』九六九頁）といわれるほどの状況でした。

幕府は、対蒙古政策に影響を及ぼしかねない日蓮教団の弱体化を図るべく、鎌倉在住の弟子のリーダー格の日朗と、鎌倉在住の檀越のリーダー格の四条頼基を中心として、逮捕・幽閉・所領没収など根こそぎ弾圧を加えていったと考えられます。こうして、初期の日蓮教団は潰滅的打撃をうけ、力をそがれてゆきます。

日蓮逮捕とほぼ時を同じくして捕縛された日朗ら門弟五人は、寺社奉行の宿屋邸裏手の土籠（土牢）に拘留されました。

佐渡へと旅立つ日蓮聖人の心残り、やはり鎌倉に置いてきた弟子や檀越たちでした。特に、牢に幽閉された弟子の日朗に対して日蓮聖人は、「日蓮は明日佐渡の国へまかるな

り。今夜のさむさに付けても、ろう(牢)のうちのありさま、思ひやられて、いたわしくこそ候へ」『土籠御書』五〇九頁)と、思いやりのこもった手紙を差し出しています。宿屋最信(行時)・光則父子は、日朗らを預かり囚禁しましたが、獄中における彼らの行儀・徳容にうたれて帰依の心をいだくようになったと伝えられます。

今日、土籠を伝える鎌倉の光則寺には、この時に幽閉された五人と宿屋最信・光則ら二人の木像が「入牢七人衆像」として奉安されています。日蓮聖人は幽閉された五人については詳しく語りませんが、寺伝では、五人のうちには日朗・日進のほか南条平七郎・四条頼基ら鎌倉の門弟が加えられています。

○ 依智星下りの奇跡

依智に到着した日蓮聖人は、数日ここに身柄を拘束されたのち、佐渡へ出立するはずでしたが、依智滞在は意外に長引くこととなりました。

九月一三日の夜、日蓮聖人は依智の本間邸で十三夜の月に向かい、月天子諫曉を行います。月天子は、法華経の中で行者を守護する誓願までたてているのに、なぜ日蓮の窮地を救わないのかと諫言したのです。

すると梅の霊木に「天より明星の如なる大星下て前の梅の木の枝にかかりてありしかば、ものゝふども皆ゑん(縁)よりとびをり、或は大庭にひれふし、或は家のうしろへにげぬ」『種種御振舞御書』九七〇頁)という依智の星下りの奇跡が起きたと伝えられています。今日、この奇瑞の伝承地として本山妙純寺・妙伝寺・蓮生寺があります。

また、依智の日蓮聖人のもとには、下総国(現、千葉県)の檀越で日蓮聖人佐渡流罪の報に接した富木常忍が大田乗明・曾谷教信・金原法橋らを派遣し慰問させ、日蓮聖人は三人の同心を賛美する書『転重軽受法門』五〇七頁)を富木常忍に書き送っています。

教団を支えてきた多くの門弟を本土に残し、日蓮聖人は、文永八年(一二七一)一〇月一〇日、依智を出発して極寒の佐渡へと向かうこととなりました。

○ 佐渡への道

相模国依智を出立した同日、日蓮聖人は武蔵国久目川(現、東京都東村山市久米川)の宿に着き、二二日には越後国寺泊(現、新潟県長岡市)の津に到着しています『寺泊御書』五一二頁)。しかし、その道程は定かではありません。

佐渡流罪の推定路に関して、近年の学説では三国峠經由(三国街道)説と碓氷峠經由(北国街道)説とがあります(高橋俊隆著『日蓮聖人の歩みと教え』第三部「佐渡配流から鎌倉退出まで」(二〇一二年)、山上弘道稿「依智から寺泊への旅」全六回「聖道(広宣寺・聖道寺寺報)」一四三〜一四八号(二〇〇三年)、高森万里子稿「日蓮聖人佐渡配流の道 鎌倉街道」『法華』八八巻二・三号(二〇〇二年)。

前者は、鎌倉街道の上道を使うのですが(中道は奥州街道方面、下道は水戸街道・佐倉街道方面)、宿場がまだ整理されていないため、往来には不便であったといわれています。罪人の護送に当たる幕府の御家人が流罪地までの護送を遂行できなかった場合、その御家人には所領没収という厳しい処罰が待っていましたので、宿場が整備された安全な信濃国(現、長野県)經由をとった可能性も考えられています。

しかし信濃国経由は、街道が整備されているものの、鎌倉時代には浄土教の一大拠点となっていた信州善光寺ぜんこうじがあつたため、日蓮聖人に危害を加えようとする輩もいたのではないかと推察され、護送人がどちらのルートをとったかについては、明白ではありません。仮に往路に善光寺を通過したのであれば、日蓮聖人は遺文の中でそのことになぜ触れていないのか疑問も残ります。

一方、復路については、「越後のこう（国府）より兵者どもあまた日蓮にそひて、善光寺をとをりしかば力及ばず。三月十三日に島を立て、同三月二十六日に鎌倉へ打入ぬ」『種種御振舞御書』九七八頁）と、佐渡流罪を赦免され文永十一年（一二七四）三月一三日に鎌倉へ還る日蓮聖人に対して越後国府から警護の兵が同行したため、聖人に危害を加えようと企てていた念仏者たちも手を出せず、難なく善光寺を通過したことが記されています。帰路に善光寺・碓氷峠ルートを利用できたのは、蒙古問題について話し合いたいという幕府の要請により、日蓮聖人が佐渡流罪を許されたことが大きな理由としてあつたからでしょう。誰人も日蓮聖人に危害を加えることが許されなかったためと思われる。

その一方で、もし往路にも善光寺ルートを利用したのであれば、『種種御振舞御書』の当該箇所にかしらの言及があつてもよさそうですが、そのことは何ひとつ触れられていません。本書の文献的信頼性については検討の余地がありますが、復路についてのみ特筆して、往路の様子について語られない理由については一考すべきでしょう。

また、日蓮聖人の佐渡往路を巡っては距離と日数から推定する研究者もいます。ただし、一〇月中旬は現在の太陽暦（グレゴリオ暦）で換算すると一・一月末にあたり、冬場の時期は日照時間が短かいため、おのずと屋外での活動時間が制限されるはずで、また天候（降雪の有無）や移動手段（平地は乗馬、山岳地帯は徒歩か）によつても一日の移動距離に異なりが生じますので、日蓮聖人佐渡往還の道程については単純に結論を出すことはできません。

○日蓮聖人への批判と門弟の懷疑

かくして一〇月二一日、日蓮聖人は、越後国寺泊に到着します。翌二二日、寺泊到着の報にしたため、自身の教説に対する門弟内外からの批判について述べた書簡を富木常忍に充てて書き送っています。それらの批判は、日蓮聖人の弘経くきやうや受難じゆなんに対する懷疑的な意見、理論偏重で実践が示されていないことに対する不満が主なものでした（『寺泊御書』五一四頁）。

このような批判は、龍口法難における門弟弾圧を契機に投げかけられたようで、日蓮聖人も、自分のために受難した門弟を気遣う心労もあつてか、落ち込む本心を吐露したようです。最も信賴している富木常忍であつたからこそ、本音を打ち明けることができたのでしょう。

しかし、こうした門弟の疑念を晴らさなければならぬという思いが、佐渡での日蓮聖人の著作活動に火をつけることとなります。

○寺泊から佐渡へ

悪天候がしばらく続いたため、日蓮聖人は寺泊で数日間足止めされました。佐渡へと渡る際にも波は荒れ、角田浜かくたはまに漂着した折には荒れ狂う波に向かって、日蓮聖人が船頭の竿

で「南無妙法蓮華經」と題目を書いたところ、たちまちに波が風いで、渡りきったという伝承が、角田山妙光寺（現、新潟市）に残っています。この時の波題目（波揺り題目）が、後の大曼荼羅にしたためられる「鬚題目」のルーツとされます。

ちなみに、「髯題目」の故事に関連して、時期は定かではありませんが、のちの大曼荼羅とは性格を異にすると思われる一遍首題（大曼荼羅のように多くの諸尊を勧請せず、首題のほかは釈迦・多宝の二仏、不動・愛染と言われる種字、花押などをしたためただけの紙本で、「佐渡百幅」と呼ばれるもの）が、佐渡配流を前後して数多く染筆され、今日伝われます。これは、識字率が低かった当時、未信の者や初対面の相手に対して、自身の信仰を表明し、法華經の行者としての信条を相手に伝えるための、今日でいうところの名刺や教箋のような機能をもたせて作成されたものとも推察されます。

いずれにせよ、日蓮聖人は、越後国寺泊を経て一〇月二十八日に佐渡に渡り、これより、文永十一年（一二七四）三月までのあしかけ四年間を佐渡の地で過ごすこととなります。

それは、「彼の国に趣く者は死は多く生は希なり」（『法蓮鈔』九五三頁）といった生活の始まりでした。

（たかもり・だいじょうⅡ立正大学元准教授）